看護学生の成長、未成長の自覚につながる要因の検討
―看護学実習経験を通して―

Examination of factors that lead to awareness of growth and undergrowth felt by nursing students -Through experience in clinical nursing practice-

佐々木　直美　　清川　由珠　　髙倉　麻実　　山本　優里
SASAKI Naomi, KIYOKAWA Yuzu, TAKAKURA Mami, YAMAMOTO Yuri

山口県立大学看護栄養学部看護学科
Department of Nursing and Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

要旨

本研究は、看護学実習において、学生自身が「成長できた」「成長出来なかった」と感じる要因について、自身の要因と周囲の要因に分けて検討することを目的とした。看護学を学ぶ３、４年生113名を対象に質問紙調査を実施し、内容分析を使用して分析した。その結果、「成長したという自覚につながった自己および周囲の要因」「成長出来なかったという自覚につながる自己および周囲の要因」に共通して、以下の４つのカテゴリーが抽出された。すなわち、【自己学習】【看護実践】【自己内省】【環境】である。【自己学習】を行い、看護において必要な知識、技術を身に着けることは、対象者に対する適切な援助への自信となり、成長の自覚につながった。【看護実践】は学生自身の成長を実感する機会となったが、一方で、対象者の状態に応じた看護過程の修正や工夫を行うことが難しかったという経験をした場合、成長できなかったという自覚につながった。【自己内省】は、実習期間中に自身の性質や行動を振り返ることを通して学生自身の課題に気づくことにつながった。そして【環境】は、実習経験が学生自身の中に蓄積されていると感じられることが成長の自覚につながることが示された。

キーワード：看護学実習、自己成長、内容分析
Key words：clinical nursing practice, self-growth, content analysis

Abstract

The purpose of this study was to examine the factors that students themselves feel "growth" and "could not grow" in nursing clinical practice, by dividing them into their own factors and surrounding factors. A questionnaire survey was conducted on 113 third and fourth grade students studying nursing, and analysis was performed using content analysis. As a result, the following four categories were extracted in common with "self and surrounding factors leading to awareness of growth" and "self and surrounding factors leading to awareness of failure to grow", That is, [self-learning], [nursing practice], [self-reflection], and [environment] categories. Performing [self-learning] and acquiring the knowledge and skills necessary for nursing gave confidence to the appropriate support for the subject and led to awareness of growth. [Nursing practice] was an opportunity to experience the growth of the students themselves. On the other hand, when the students experienced that it was difficult to modify or devise the nursing process according to the condition of the subject, it led to the awareness that they could not grow. [Self-reflection] led to the students becoming aware of their own problems by looking back on their own nature and behavior during the clinical training period. In [Environment], it was shown that the feeling that the practical experience was accumulated in the students themselves led to awareness of growth.

Ⅰ．緒言

看護学実習の中でも臨地実習は、看護学教育において独自かつ特徴的でありもっとも重要な教育形態である[1)]。患者やその家族に対して、学内の講義や演習等で学んだ知識や技術を実際に実践する中で、学生は自身の未熟さを感じたり、対象者に対して看護学生として何が出来るのかということに直面し、悩んだりすることもある。しかし対象者が安心して学生に手技を任せてくれたり、「あなたがいてくれて良かった」という言葉をかけてくれたりといった体験は、学生たちの自己肯定感や自発性を高め[2) 3)]、さらに良い看護の追求へと結びついていく。このように、学生は、実習を通して、自身の成長を実感しながら実習を行っていると考える。

看護学実習は、看護の対象となる人との相互作用を通して発展する[4)]。学生が関わる対象者は、患者、家族を中心とし、実習先の看護師、他職種のスタッフ、教員など多岐にわたる。よって、看護学実習は、学生の努力だけで達成できるものではなく、周囲の人々の存在によって支えられている。このように、実習が学生にとって成長する機会となるにおいては、自身の頑張りだけでなく周囲の要因も欠かせない。

これらのことから、看護学実習は、学生たちが技術的にも人間的にも成長する良い機会であるが、この学習機会をより有意義にするために、本研究では、実習において、学生自身が「成長できた」「成長出来なかった」と感じる、自身による要因と周囲による要因について検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 質問紙調査の実施方法

質問紙調査は、A大学の看護学科に所属する３、４年生79名を対象に実施した。調査用紙は、講義後に配布し、質問用紙内に記載した文章と口頭にて、研究目的と調査内容、および倫理的配慮について説明し調査の依頼を行った。回答用紙は回収ボックスにて回収を行った。

2. 調査内容

質問紙の内容は、①学年を問う項目、②実習経験を通して成長した（出来るようになった・出来た）という自覚につながる自分の要因を問う項目、③実習経験を通して成長した（出来るようになった・出来た）という自覚につながる周囲による要因を問う項目、④実習を通して自分の成長につながらなかった（出来るようにならなかった・出来なかった）という自覚につながる自分の要因について問う項目、⑤実習を通して自分の成長につながらなかった（出来るようにならなかった・出来なかった）という自覚につながる周囲による要因について問う項目とした。②～⑤の項目は、自由記述で回答させた。なお、すべての質問において、特定の実習に限定することなく、これまでの看護の実習を振り返って記入すること、そして回答者自身や回答者が関係した人について個人が特定されるような内容を記入しないよう求めた。

3. 統計処理

調査内容の②～⑤について自由記述で回答された文章をよく読み、クリッペンドルフの内容分析[5)]の手法を用いて分析を行った。内容分析では、自由記述を内容で区切り、一文ずつに分け１つのコード（以下＜　＞）とした。次に類似した意味内容の要素を集めて、それらを表す表現に書き換えてサブカテゴリー（以下［　］）とした。続いて、サブカテゴリーも同様に類似の意味内容を集約してカテゴリー（以下【　】）とした。分析過程においては常にコードを読み直し、意味内容の分類が適切であるかどうかを確かめ、さらに質的研究を行う専門家にスーパーバイズを受け妥当性を高めた。

4. 倫理的配慮

研究対象者の不利益とならないよう配慮し、調査目的および調査内容について書面を用い、口頭および文書にて説明を行った。その内容は、調査は任意であり、協力しないことによる不利益はないこと、アンケートは無記名であり個人が特定されることはないこと、情報は慎重に取り扱うこと、アンケートは本研究以外では使用せず研究終了後の一定期間保管した後に適切に破棄すること、学会発表や論文投稿という形で公表する予定であること、アンケートを提出した後は同意撤回が出来ないこと、アンケートの回収は回収ボックスにて行なうこと、問い合わせ先である。なお、本研究は著者の所属先の生命倫理委員会の承認を経て実施した【承認番号2019-43号】。

Ⅲ．結果

1．調査対象者の属性

本研究の対象者は、３年生が37名、４年生が42名であった。回答に欠損がなかったため、すべての回答を分析対象とした。本調査は４月に実施しており、３年生は基礎看護学実習、４年生はそれに加え成人看護学実習と老年看護学実習を終了した看護学生であった。

2．実習を通してもっとも成長した、成長しなかったと感じた自分および周囲の要因について

実習を通してもっとも成長した自己の要因（以下、成長：自己要因と示す）、もっとも成長しなかった自己の要因（以下、未成長：自己要因と示す）、自己の成長につながった周囲による要因（以下、成長：周囲要因と示す）、自己の成長につながらなかった周囲による要因（以下、未成長：周囲要因と示す）に関する内容分析の結果を表１に示す。「成

表1　実習を通して成長した、成長しなかったと感じた自分および周囲の要因についての内容分析結果（複数回答を含む）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	回答数 成長自己	未成長自己	成長周囲	未成長周囲
自己学習	知識や技術を深めるための自己学習	技術練習	6	4		
		文献の活用	6			
		疾患に関する自己学習	4	10		
		講義	1		2	
		コミュニケーションに関する学習		2		
看護実践	看護過程	対象者の観察	3			
		看護過程をよく考えて取り組む	2	1		
		アセスメントの見直し・修正の積み重ね	1	1		1
		カルテや家族からの情報収集に基づいた看護計画の立案	1	2		
	看護実践	積極的に対象者とコミュニケーションをとる	8			
		対象者の体調や状況を踏まえた上での関わり	5			
		対象者の反応を見ながらの言葉がけ	3	2		
		看護記録を丁寧に書く	2	3		
		根拠に基づいた看護実践	2			
		在宅移行を踏まえた看護	1			
自己内省	心理状態	焦らず、落ち着いて物事を考える	1	1		
		緊張してしまう		2		
		失敗した時の周囲の反応への恐怖心		1		
		ケアに対する恐怖心		1		
	性格	気持ちの切り替え	1	1		
		消極性		2		
		自信のなさ		1		
		要領の悪さ		1		
		面倒くさがり		1		
		専門的な技術には関われないという思い込み		1		
		看護師の仕事の責任の重さへの重圧感		1		
	スキル	時間管理の工夫	2	4		
		周囲の良い行動を見本、参考にする	2		4	
		自分の考えをまとめ、伝える	1	4		
		計画性を持って課題を進めること		1		
	視点・思考	多角的な視点で考える	1	2		
		思考を広げる		5		
	向上心	出来る限りの看護介入を考える		1		
		疑問を持って実習を行う		1		
環境	実習経験	実習の積み重ね	6		1	1
		さまざまな年齢の対象者と関わる機会	2			
		対象者とともにじっくり過ごす環境			1	
		事例検討会でのグループメンバーとの意見交換			3	
	教員や看護師	教員、看護師への相談、助言、指導	2		43	
		多忙な看護師に対する委縮、遠慮		6		4
		看護師、教員、対象者の持つ雰囲気			2	
		拒否的な看護師の対応				2
	対象者	対象者のコミュニケーション力			2	
		対象者のADLの自立				9
		対象者との相性			1	
		受け持つ対象者の変更				2
	他職種	他職種からの助言、指導			2	
	友人	友人への声かけ、支え合い	1		4	

長：自己要因」「未成長：自己要因」「成長：周囲要因」「未成長：周囲要因」に共通して４つのカテゴリー、13つのサブカテゴリー、48つのコードが抽出された。カテゴリーは、【自己学習】【看護実践】【自己内省】【環境】であった。統計的な検討は行っていないため、得られたコードに関する回答数をもとに、各カテゴリーについて述べる。

まず１つ目のカテゴリーである【自己学習】についてである。

＜技術練習＞ ＜文献の活用＞＜疾患に関する自己学習＞といった看護の知識や技術を身につけるために、学生自身が課題を見つけ自主的に取り組む学習を行えたという自覚は「成長：自己要因」につながっており、その学習が不足しているという自覚は「未成長：周囲要因」へとつながった。

２つ目のカテゴリーである【看護実践】についてである。

［看護過程］の立案や、＜積極的に対象者とコミュニケーションをとる＞＜対象者の体調や状況を踏まえた上での関わり＞といった［看護実践］を通して得た、看護が出来たという自覚は「成長：自己要因」とつながっていた。しかし＜カルテや家族からの情報収集に基づいた看護計画の立案＞や＜対象者の反応を見ながらの言葉がけ＞などが出来ていなかったという自覚は、「未成長：自己要因」へとつながった。

３つ目のカテゴリーである【自己内省】についてである。

＜焦らず、落ち着いて物事を考える＞＜緊張してしまう＞という［心理状態］、＜気持ちの切り替え＞＜消極性＞＜自信のなさ＞といった[性格]、＜時間管理の工夫＞や＜自分の考えをまとめ、伝える＞といった［スキル］、＜多角的な視点で考える＞＜思考を広げる＞といった［視点・思考］、＜出来る限りの看護介入を考える＞＜疑問を持って実習を行う＞といった［向上心］の自覚は、「成長：自己要因」「未成長：自己要因」へとつながっていた。また＜周囲の良い行動を見本、参考にする＞は「成長：周囲要因」につながった。

４つ目のカテゴリーである【環境】についてである。

［実習経験］の中でも、＜実習の積み重ね＞は、これまで自身が実習を積み重ねてきたことが「成長：自己要因」につながったと自覚する者、それは周囲の協力によるものとして[成長：周囲要因]と捉えている者、周囲が十分に与えてくれなかったとして［未成長：周囲要因］として捉える者がいた。＜さまざまな年齢の対象者と関わる機会＞は「成長：自己要因」につながり、＜対象者とともにじっくり過ごす環境＞＜事例検討会でのグループメンバーとの意見交換＞は、[成長：周囲要因]につながっていた。

［教員や看護師］は、＜教員、看護師への相談、助言、指導＞について、学生自身が積極的にそれを受けたという自身の姿勢を「成長：自己要因」として捉えている者もいたが、多くは［成長：周囲要因］として捉していた。＜多忙な看護師に対する委縮、遠慮＞は、委縮や遠慮をしてしまう自身の問題として「未成長：自己要因」と捉えている者もいたが、委縮させてしまう看護師側の問題として「未成長：周囲要因」と捉えている者もいた。また＜看護師、教員、対象者の持つ雰囲気＞の良さは[成長：周囲要因]につながり、＜拒否的な看護師の対応＞は［未成長：周囲要因］へとつながった。

［対象者］による＜対象者のコミュニケーション力＞＜対象者との相性＞は［成長：周囲要因］として捉えており、＜対象者のADLの自立＞と＜受け持つ対象者の変更＞はケアが出来ない、学びを深めることが出来ないという考えから、［未成長：周囲要因］につながった。

［他職種］すなわち、＜他職種からの助言、指導＞は、看護以外の職種から助言をもらうことが対象者理解や援助につながるとして[成長：周囲要因]につながった。

［友人］は、＜友人への声かけ、支え合い＞について学生自身から友人を助けた、支えたと感じていた場合は、［成長：自己要因］につながり、友人から支えられたと感じていた場合は、［成長：周囲要因］につながった。

Ⅳ．考察

1．実習を通してもっとも成長した、成長しなかったと感じた自分および周囲の要因について

ここでは、カテゴリーごとに考察を行う。

＜技術練習＞ ＜文献の活用＞などといった【自己学習】は、自身の成長の自覚につながっていた。岡本ら[6]は老年看護学実習を行う上で、高齢者の特徴や医療、看護などに関する知識、技術の向上は、専門職としての成長につながると述べている。また、

戸田[3]も、母性看護学実習を経験した学生の自己効力感を高める要因の一つとして「事前学習」を挙げている。これらの先行研究や本研究の結果から、事前、実習中、事後において自己学習を行い、看護において必要な知識、技術を身に着けることは、対象者に対して適切な援助が出来ているという自信につながると考えられる。

［看護過程］の立案や＜対象者の体調や状況を踏まえた上での関わり＞などの【看護実践】も自身の成長の自覚につながっていた。鶴田[7]は、基礎看護学実習を行う中で、対象者のニーズをとらえたケアを提供するという看護師としての役割を果たすことが学生の成長につながると述べている。また中本ら[8]も、基礎・成人看護学実習を経験した学生の実習における困難感として看護過程の展開や患者との関わりや看護援助の実施を挙げていた。林田ら[9]も、臨地実習を通して、学生が感じた課題として知識・技術・経験の不足、看護展開能力の不足を挙げている。これらのことから【看護実践】は、学生を成長させるものでもあるが、困難を感じさせるものでもあるといえる。看護過程の立案や実施は、対象者その人を理解した上で行うものであり、画一的に行えるものではない。本研究においても、＜カルテや家族からの情報収集に基づいた看護計画の立案＞や＜対象者の反応を見ながらの言葉がけ＞などが出来ていなかったという自覚を未成長として示した学生もいた。このように対象者の状況に応じてアセスメントは見直され、関わり方を検討していくといった、対象者の状態、状況に応じた看護介入の変更や工夫は、成長を実感する機会でもあるが、そういった変更への対応をすることに困難さを感じる場合には、成長出来なかったという自覚につながると考えられた。

［心理状態］［性格］［スキル］［視点・思考］［向上心］といった自身の状態や特性に気づく【自己内省】は、自己の成長だけでなく未成長の自覚につながっていることが見て取れた。これらのサブカテゴリーは、それぞれ意味が異なる。デジタル大辞泉によれば、心理状態は心の働きのありようを指し、性格はその人固有の感情や意思であり、長期間変化しにくいものであるとされる。スキルは、学習や訓練によって得られる技術であり、視点は物事を見たり考えたりする立場、思考は感覚や表象の内容を概念化し、判断し、推理する心の働きや機能を指す。向上心は現在の状態に満足せず、よりすぐれたもの、より高いものを目ざして努力する心を表す。林田ら[9]は臨地実習における学生が感じた課題の中で自己管理の難しさを挙げている。このように、実習中や実習を通して自身の性質や行動の振り返りを通して、自身の良い点、自身の持つ課題に気づき、実習終了後もそれに対して意識を向け続けることは人間的成長へとつながるため重要と考えられる。

［実習経験］［教員や看護師］［対象者］［他職種］［友人］といった【環境】は、自己の成長、未成長、周囲による成長、未成長という自覚につながっていた。［実習経験］について、佐藤ら[2]は急性期実習を通して学生は実習の積み重ねを自己成長として挙げていたことを報告している。本研究も同様の結果を得ていることから、学生にとって実習経験が自身の中に蓄積されていると感じられることが重要であると考える。［教員や看護師］について、＜教員や看護師への相談や助言、指導＞は学生にとって成長したという自覚につながる周囲による要因であった。下野[10]、近藤ら[11]は、精神看護学実習において、教員の傾聴、承認、的確な助言が学生の肯定的体験につながると述べている。また本研究において＜拒否的な看護師の対応＞は自身が成長出来なかったと感じる周囲による要因として挙げられていた。清水ら[12]においても、成人看護学実習を経験した学生において、担当看護師の有無ではなく、学生の発言や記録に対する看護師の無関心が、学生自身の成長の感じられなさにつながると報告している。［対象者］については、＜対象者のコミュニケーション力＞の高さや＜対象者との相性＞の良さは、学生自身の成長への助けとして自覚されていたが、＜対象者のADLの自立＞や＜受け持つ対象者の変更＞は、援助を提供する機会がないと捉えてしまい、その結果、成長できなさとして感じられる周囲による要因として挙げられていた。中本[8]も、成人看護学実習中に患者変更があったことを実習中の学生が感じる困難感の一つとして挙げている。

ここまで述べてきたように、看護学実習を通して成長出来た、成長出来なかったという自覚につながる自分の要因、周囲の要因が見いだされ、先行研究を概ね追従する結果となった。

2. 4つのカテゴリーから考えられる、実習が成長につながるためのサイクル

本研究を通じて、［成長：自己要因］［未成長：自己要因］［成長：周囲要因］［未成長：周囲要因］に共通して【自己学習】【看護実践】【自己内省】【環境】という４つのカテゴリーが得られた。この４つが、学生にとって実習が成長につながるための要因となると考える。学生たちは、［実習経験］［教員や看護師］［対象者］［他職種］［友人］という【環境】という資源の中で、知識や技術を身に着ける【自己学習】を行い、それを【看護実践】を通して発揮する中で、実習中の自身の［心理状態］や［性格特性］、［スキル］、［視点・思考］といった自身の持つ課題に直面し【自己内省】を行うと考える。また、【自己内省】が【自己学習】や【看護実践】に活かされていくこともあるであろう。この３つは順序性を持つものではなく、循環していくことが重要であると考える。

西田[13]は、看護における〈ケアリング〉は、〈実践知〉としての看護実践全体であり、〈ケアリング〉を支えているのは、看護師として患者にどう向き合うかということであると述べている。ここに表れているように、対象者個人の疾患のみならず、家族構成や仕事といった背景、性質やものの考え方、その日の体調等を踏まえた上での【看護実践】は、看護専門職としてもっとも核となるものである。しかし、学生は学修途中であるため、看護実践を難しいと感じることは自然なことであり、その難しさを感じたときに、自身を支えてくれるのが【自己学習】である。また同時に【環境】も支えとなる。［実習経験］という実習の場や時間は、難しさに直面しつつもそれを乗り越えるための経験を与えてくれる資源であり、［教員や看護師］は技術、知識を与えてくれるだけでなく、承認や励ましといった心理的支えでもある。［対象者］は、学生の行動や言動に対して反応を返してくれることにより、学生は自身を振り返り見直す機会を得ることが出来る。［他職種］は、看護以外の視点から情報や理解を与えてくれることにより、より多角的な対象者理解が可能となる。［友人］は、時にその行動が見本となり、時に、励ましあい助け合うといった情緒的支えとなる。このような【環境】が学生個人を支えていることが、よりよい【看護実践】へと背中を押してくれると考える。また、【看護実践】を行う中では、自身の課題や問題に気づく【自己内省】の機会が増える。この【自己内省】にある「気づく」という行為が行動変容のための第一ステップであるため重要である。そして第二ステップとして望ましい行動へと変えることである。望ましい行動に変えていくためには、性格や性質といった長期間変わらない［特性］として捉えている視点を、学習や訓練で変えることが出来る行動レベルである［スキル］として捉え直していくことが重要であると考える。また、＜対象者のADLの自立＞や＜受け持つ対象者の変更＞は、成長出来なかったと感じられる周囲の要因として挙がっていたが、どのような対象者であっても、目の前の対象者を理解したいという態度を持ち、その対象者に対して、自身が何が出来るのかを考えることが学びであり、その前向きな学生の態度が、対象者との関係性をより深め、より質の高い看護実践へと結びついていくことを心に留めておくことが重要と考えられた。

引用文献

1）日本学術会議　健康・生活科学委員会看護学分科会：報告　大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準　看護学分野、2017年９月29日.

2）佐藤美紀子、森山美香、矢田昭子、秋鹿都子：成人看護学実習(急性期)における看護学生の成功体験、島根大学医学部紀要、35、39－46、2012.

3）戸田美幸：母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因（文献レビュー）、聖泉看護学研究 、７、41－46、2018.

4）看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標：
平成30年６月一般社団法人日本看護系大学協議会 https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf（2020.12.28検索）

5）Krippendorff K.（著）　三上俊治（訳）：メッセージ分析の技法「内容分析」への招待，勁草書房，東京，1989.

6）岡本さゆり、一ノ瀬公美、澤田和子、古城幸子：老年看護学実習におけるポジティブ体験から得られた２つの成長－「専門職としての成長」と「人間としての成長」－、インターナショナルNursing Care Research 、19（１）、119－127、2020.

7）鶴田晴美：基礎看護学実習において患者‐学生間の良好な人間関係が築けたと感じた場面と学生の気持ち、日本看護学教育学会誌、29（３）、29－41、2020.
8）中本明世、伊藤 朗子、山本純子、松田藤子、門千歳、横溝志乃：臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較－基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して－、千里金蘭大学紀要、12、123－134、2015.
9）林田りか、吉田恵理子、高比良祥子：『看護学実習の統合』科目において抽出された学生の課題、長崎県立大学看護栄養学部紀要、15、41－49、2017.
10）下野義弘：精神看護学実習における学生のポシティブ体験の分析、鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要、23、30－40、2019.
11）近藤浩子、阿達瞳、秋山美紀、林世津子：精神看護学実習における学生のポジティブ体験とその要因に関する研究、東京医療保健大学紀要、８（１）、9‐19、2013.
12）清水登紀子、桝本朋子、影本妙子：清水学生担当看護師の有無による実習指導効果の比較、川崎医療短期大学紀要、38、17‐23、2018.
13）西田絵美：看護における〈ケアリング〉の基底原理への視座：〈ケアリング〉とは何か、日本看護倫理学会誌、10（１）、8－15、2018.